

地域環境の荒廃と生活問題

研究員 寺林暁良

1 はじめに

社会学者の大野晃氏が提示した「限界集落」のように、農山漁村の人口減少や高齢化の進行により集落の共同作業や相互扶助の機能を維持することはますます難しくなっている。

この「限界集落」化と並行して、地域環境の荒廃も進んでいる。農山漁村の環境についてしばしば学者が主張するのは、水源涵養や国土保全といった「多面的機能」あるいは「生態系サービス」の面から、その保全が重要であるということである。しかし、農山漁村の生活者の立場では、地域環境の荒廃は生活環境の悪化であり、そこに住み続ける上での問題としてとらえられるだろう。

2 A川河川敷ヨシ原の事例

地域環境が荒廃することによって起こる生活問題の具体例として、A川河川敷の約400haのヨシ原をみてみよう。

同河川敷に生えるヨシは、1970年代ころまで茅葺^{かやぶき}屋根や海苔簀^{のりす}(ノリの乾燥に用いるスダレ)の材料として高い経済的価値をもっており、積雪前に集落総出で残らず刈り取りを行っていた。そして、それを業者に売却することによって自治会の費用にあて、剰余金は各戸に分配されていた。

ヨシには現在も伝統文化財の保存などの需要があり、集落から刈り取りや販売の委託を受けた業者による経済活動が行われている。しかし、需要量はかつてほどのものではなく、

ヨシ原のほとんどが放置されるようになってきた。

刈り取りが行われないヨシ原では、春先に「火入れ」を行うことによって代替的な管理としてきたが、その大規模化に伴って近隣住民から煙灰害への苦情も多く、これも近年は行われなくなった。

こうしてヨシ原の放置が進んだことによって、多くの問題が噴出している。まず、当地で生態学的調査を行う学者は、ヨシ原の乾燥化や樹木類の侵入が進むことによって、希少鳥類の生息地の減少など、生物多様性の低下につながっていると指摘している。

一方、集落にとってヨシ原の荒廃は次のような生活問題につながっている。第一に、枯れたヨシの残るヨシ原が害虫の温床となり、周辺農地に被害を与えていることである。第二に、乾燥した枯れヨシが残ることによって、春から夏にかけて原野火災が頻発するようになったことである。第三に、ヨシ原へのゴミの不法投棄が増加したことである。

このように、地域環境の荒廃は、さまざまな生活問題を引き起こすことにつながっている。

3 地域環境の荒廃で生じる問題

上記の事例と同じように、環境が利用・管理されないことによって鳥獣害や虫害、不法投棄の温床となったり、災害のリスクを増大させる等の問題が、耕作放棄地や山林(薪炭林、



A川河川敷のヨシ原

竹林、栗山など)、茅場、藻場など、農山漁村の多くの環境で起こっている。

これは、「経済的価値の低い資源をどう管理するか」という問題である。つまり、自然資源の経済的価値が低いため、コストをかけてまでその環境の利用・管理を行うことができない。しかし、利用・管理をしないことで別のリスクやコストが発生し、生活問題となるのである。

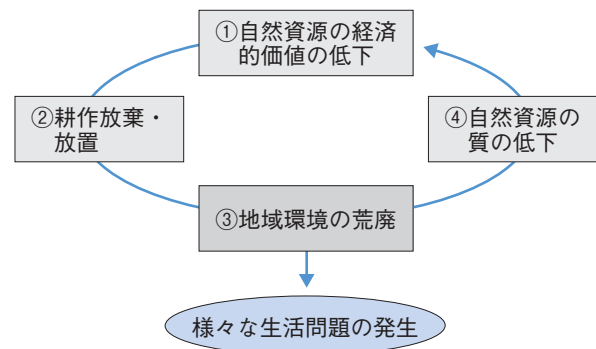
そして、自然資源が管理されないことで、その質自体も低下する(例えば、ヨシであれば、前年に枯れたヨシが混入すると、経済的価値は極端に下がる)ため、さらに経済的な価値が低下する。このため、ますますそれらが利用・管理されなくなり、生活環境も悪化する。このような悪循環が日本中で生まれている。

4 解決の途^{みち}を探る

この問題の解決は容易ではないように思われる。というのも、自然資源の利用・管理については、過剰利用を扱う理論はある(コモンズ論、外部経済理論など)ものの、過少利用を扱う理論はほとんどないからである。

経済の面からは、採算ベースにのるような

第1図 自然資源を利用しないことによる悪循環



資料 筆者作成

自然資源の新たな利用を考えていく必要があるほか、政治の面からは、地域環境が利用・管理されないことによるリスクやコストを見越した上での管理支援策が必要となるだろう。そのためには、非営利組織(NPO)やボランティアなどの活用も求められよう。

難しい課題ではあるが、このような視点から自然資源の利用・管理のしくみを作り上げるための方策を考える必要があるだろう。

5 おわりに

地域社会では今、少子高齢化やそれにとともなう集落機能の低下など、農山漁村での生活を成り立たせるための基礎的条件が次々と崩壊しつつある。地域環境の衰退もその一つである。地域環境の荒廃は、そこに住む人々にとっては切実な生活問題であり、それがさらに地域社会の衰退を招くという悪循環をもたらしている。農山漁村がますます暮らしにくい環境となる前に、早急な対応をとることが求められている。

(てらばやし あきら)